

# 文語の苑

メールマガジン第五号

文章語と会話語

愛甲次郎

私は大学を卒業して通産省に入った時先輩たちが文章語で会話をしているのに唖然とした。一種のカルチャーショックである。

チベットに仏教が伝わったのは日本と大体同じような時期であるが、七世紀のソンツェンガンボ王はその臣トンスンポをインドに留学させ、仏教経典を学ばせた。トンスンポは帰国後サンスクリット語の経典を翻訳したが、そのためには改めてチベット文字を作り、チベット語文法を整備する必要があった。そうして始めて翻訳が可能になり、その後数世紀にわたり翻訳作業が続けられた。チベット語経典は極めて忠実な訳であって、サンスクリット語の経典が失われたときはチベット語経典からサンスクリット語への再翻訳が行われたほどである。仏教の研究にチベット大蔵経は重要な役割を果たしている。

思うに仏教伝来の頃のチベット語はまだそれほど精緻でなく、抽象性の高い経典の内容を盛るためにトンスンポが作った人工的な文章語は当時の常用チベット語とはかなり乖離していたであろう。その後チベットでは会話語と文章語との間で交流が進み、やがてチベット語自体が変容して行ったに違いない。

チベット語はシナ・ビルマ語系の言語で孤立語に属するが、膠着語的要素もある。それとは全く系統の異なるインドアーリアン系のサンスクリット語とどのように折り合いをつけたか、専門的知識がないから分らないが、興味ある話題である。

日本でも仏教伝来の頃似たような事情があったらしい。鹿島神宮の萩原参事から聞いたところによると、当時大陸から漢字が入ってきて記録することが可能となり、古くからの民間伝承が各民族の手によって文書化された。この作業を担ったのは主として朝鮮からの渡来民であったが、彼らは文意を明らかにするため土着語には本来なかった助詞などの文法的要素を取り入れることとした。そこでウラル・アルタイ系の文法が日本語に入り込んだというのである。そのような文章語は日常使われる会話語とはかなりかけ離れたものであったようだ。奈良時代までは日本の寺院の公用語は漢語だった位だから、このような言語状況を当時の人はあまり気にしなかったことであろう。その後徐々に会話語と文章語の融和が進んだに違いない。

以上述べたことは専門家の目から見れば怪しいこともあるかも知れないが、会話語と文章語との間の緊張関係は文化の発展にとって悪いものではあるまい。

平成二十三年十月

# 文語の苑

メールマガジン第五号

## 小倉百人一首 五 柿本人丸

あし引の山鳥の尾のしだりをの ながながし夜をひとりかもねむ

小倉百人一首全体の構成は、最初に天智天皇と持統天皇の親子、次に万葉集時代の代表的歌人二人、最後も後鳥羽院と順徳院の親子、その前に新古今集時代の代表的歌人の藤原定家と家隆が来ます。その最初の万葉集時代の代表的歌人の一人が、柿本人丸です。

ただ残念ながら私は、藤原定家が柿本人麻呂の歌としてこの歌を撰じたことに、同感できません。恐らくこのことに対しては、共感なさる読者の方も多いのではないでせ(しよ)

うか。最初に述べましたや(よ)うに、現代の私たちには、江戸時代の国学、明治以後の万葉集研究の成果、さらに正岡子規による古来の和歌に対する見方の転換によって、万葉集の歌全般、特に柿本人麻呂の秀歌に親近感があります。私には特にその感覚が強いのか知れませんが、なぜこんな愚歌で柿本人麻呂を代表させるのか、との感を禁じ得ません。

小倉百人一首の解説書には、「ながながし」といふ(う)言葉を導き出す序の、「の」を重ねた修辭が、なかなか明けない夜の長さを実感させるとか、山鳥には雌雄別れて寝る習性があるとか書かれてゐ(い)ます。いくらそんな解説を読んでも、私には、この歌がよい歌だとは感じられません。結局私は、平安時代の人たちがこの歌を名歌だと考へ(え)、藤原定家がこの歌を、柿本人麻呂の代表作として撰じた感覚に、共感する力を失ってしまった(い)るのでせ(しよ)う。

百人一首で柿本人麻呂の名は「人丸」と表記され、「丸」といふ(う)人名には、姿や経歴の定かならぬ伝説中の人物、といった趣きがあります。藤原定家よりずっと万葉集時代に近い「古今集」の時代ですら、すでにさ(そ)うでした。古今集撰者の紀貫之は、柿本人麻呂について、仮名序に次のや(よ)うに書きます(私の仮訳、括弧内注記)。

「奈良の帝(どの天皇か不明だが、柿本人麻呂の時代の都は奈良ではなかった)の治世には、正三位の位の柿本人麻呂が歌の聖であった。主君も歌人も一体だったと言ふ(う)ことだら(ろ)う。秋の夕暮れ、竜田川に流れる紅葉を、帝は錦と御覧になり(「竜田川紅葉乱れて流るめりわたらば錦中やたえなむ」、奈良の帝の歌と伝へられるが、人麻呂の時代の歌ではない)春の朝、吉野山の桜は、人麻呂の心に雲かとさへ(え)思は(わ)れた(歌は不詳、但し人麻呂の時代に、吉野山の桜は未だ植ゑ(え)られてゐ(い)なかつた)」

ここには柿本人麻呂が正三位、つまり大納言クラスの高官だったとされてゐ(い)ますが、紀貫之の時代認識は、注記したや(よ)うにかなりあやふやであり、今の学界の大勢は、柿本人麻呂は生前、もっと低い位の役人だったと考へ(え)ます。但し哲学者の梅原猛氏は、「水底の歌」等の万葉集論で、この学界の大勢に異論を提起して居られます。

以下に柿本人麻呂の、長歌の反歌以外の、短歌の秀歌を、三首挙げておきます。

淡海の海夕浪千鳥 汝が鳴けば心もしのに古(いにし)へ思ほゆ

天離(あまさか)るひなの長道(ながぢ)ゆ恋ひ来れば 明石の門(と)より倭島見ゆ

あしひきの山河の瀬の響(な)るなべに 弓月(ゆづき)がたけに雲立ち渡る

# 文語の苑

メールマガジン第五号

## 文語歌曲「故郷を離るる歌」(大正翻譯唱歌)

そもそも戦争といふのは、多勢の男の移動を伴ふものです。關ヶ原で東西の武士が全國から移動して集決戦が行はれましたが、その後二百六十五年間は平和が維持されました。しかし参観交替が制度化されて、地方と江戸との間を多くの人々が往來しました。しかし明治になるとそれ以上に、日本では曾て無いほどの大勢の國民が移動しました。戊辰戦争ともなると、九州の人間が北海道まで行つて戦争をしてゐますし、京都から江戸東京への遷都といふ大變革も行はれ、大移動が起りました。中央行政機關が東京に集り、たとへば雅樂を演奏する伶人も京都や奈良、大阪から移されてゐます。當然生れ故郷を離れる人數も龐大なものでした。一方、中央の指導者は、国防のためもあつて「故郷」を國民に強く意識させようとなりました。明治唱歌に「皇國の守り」といふ歌があり、わが墳墓の土地をたれにか踏ませんとあります。多くの者が放れていつた土地を、唱歌によつて「ふるさと」としてのイメージに定着させようとしたのです。

この歌「故郷を離るる歌」も、歐米のメロディを借りて作られました。ドイツの民謡 Der letzte Abent に吉丸一昌が、その民謡とは全く関係のない詩をつけたものです。

一 園の小百合、撫子「なでこ」 垣根の干草。 / 今日汝を眺むる最終「をほり」の口なり。

\*汝「なれ」「なんじ」は對等又はそれ以下の者に用ゐ、我「あれ」に對する「こ」は。思へば涙、膝をひたす、さらば故郷「ふるさと」。 / さらば故郷、さらば故郷、故郷さらば。

二 つくし摘みし岡邊よ、社の森よ。 / 小鮒釣りし小川よ、柳の土手よ。  
\*さらば 然有ら+ば、「それでは(お別れを)」「さやうなら」は「然様ならば」

別るる我を憐「あはれ」と見よ、さらば故郷。 / さらば故郷、さらば故郷、故郷さらば。  
\*し 摘みし、釣りし、に出てくる「し」は、自分が直接經驗したことを回想するときに使ふ助動詞「き」の連體形。單なる過去を示すものではない。活用も變則的であり、力行變格活用の動詞來につく時は二様の讀みがある。こし、きし

三 此處に立ちて、さらばと、別れを告げん。 / 山の陰の故郷、靜かに眠れ。

夕日は落ちて、たそがれたり、さらば故郷 / さらば故郷、さらば故郷、故郷さらば。  
\*ん 平安の始め頃には、發音にmとnの二つがあつたが、「ん」といふ字がまだ作られてはゐなかつたため、梅、馬は、むめ、むまと書かれるのが普通だつた。「む」を「ん」と書くことで意味の混同が起り易く、特に歌ではかなり問題の多い單語である。こころは、意志あるいは覺悟を示す。

\*たそがれたり「黄昏+たり(斷定の助動詞)」、黄昏は夕方を意味する漢語。和語では「た(誰)そ・かれ(彼)」、あの人は誰の意。薄暗いからで、朝だと「か(彼)は・たれ(誰)」といふ。

# 文語の苑

メールマガジン第五号

吾無なくに 愛國百人一首を讀む(三)

吾が背子はものな念ひそ事しあらば火にも水にも吾無なくに

安倍郎女

吾が背子はわたくしの夫、念ひは「おもひ」と訓みますが考へてものを思ふ意味で、これが禁止を表す「なぐそ」の間に入る事で「心配するな」の意となります。事しあらばの「し」は強調を表す副助詞で「事でも起れば」の意、無けなくにの「無け」は「無し」の上代未然形、次の「なく」は一般に打消の助動詞「ず」のク語法と言はれるもので、「ず」の上代活用では、ク語法が接續する場合のみ未然形が「な」となります。最後の「に」は接續助詞で逆接と言つて「と言ふのではないのだから」の意味をもたせる役割があり、此の場合は「無い譯ではないのだから」の意となります。

依つて歌意は、我が夫よ、何か事が起つたとしても私がゐない譯ではないのですから火でも水でも心配しないで下さい、となります。

何といふ頼もしい歌でせう。ここには夫への深い愛情と一家を擔ふ妻の力強い意思が感ぜられます。しかも是は我が國の傳統的な家庭のあり様で、即ち、家庭内では女性の地位確立が特に重要であることを、日本人は男女を問はず、今日まで喜んで支持し續けて來ました。作者の安倍郎女は傳記も詳らかではないにも拘らずこの歌が傳はつたのは幸ひでした。

森鷗外は大正元年から四年にかけて、珠玉の歴史小説を續けて發表しましたが、その中、「護持院ヶ原の敵討」では娘りよが漸く見つかつた父の敵虎藏が將に逃げんとする所を斬つて仇討ちを果し、「山椒大夫」では囚はれの身にあつて姉の安壽が自らを犠牲にして弟の廚子王を山椒大夫の屋形から脱走せしめ、「最後の一句」では死罪となつた太郎兵衛の娘いちが父の助命嘆願書を自分で書いて奉行所を動かし、遂に父を救ふなど、いづれも女性の家族への大きな愛情と固い意思とを主題としたものでした。

まさに安倍郎女の心意氣が連綿と受繼がれてゐるではありませんか。これらの作品が世に出たこの頃は、恰度平塚らいてうの「元始」、女性は實に太陽であつた」と共に「青鞞」が創刊され、「婦人解放」運動が始つて(明治四十四年)間もなくのことであり、鷗外も恐らく「新しい女」の素晴らしい活躍を期待したに違ひありません。

さうして平成の今日、なでしこジャパンの快撃がありました。サッカーのみならず、フィギュアスケート、柔道、レスリングを始めスポーツの各種目、いやスポーツ以外の分野でも、日本女性の活躍は目を瞠るものがあります。さう思つて掲出の歌を讀み返してみますと、何ともいへない優しい勵ましのメッセージが傳はつて來ます。東日本大震災を始め、國難相次ぐ中ですが、強い愛情と意思で難局を克服してゆきたいものです。

市川浩

# 文語の苑

メールマガジン第五号

カーチェイス

一日、三島に用向きありて車を驅る。練馬の家を出て環八に進入するや、ただちに東名高速道料金所より谷原まで車列がひと続きになりたるを悟る。高速道土日千圓のなせる業なり。用賀よりやうやう高速道に入りたるに、まづは三車線の左端に位置を占めたり。

いくらか進みて中央車列の進み方が速きことに氣付き、機會を狙ひて移動す。前の車は鮮やかなる口ゴを帯びしトラックにて、積載重量十三トンの大型有蓋車なれば、果たして余前方の視界を得ず。ややありてこの巨大なるトラックの左車線に移るや確かに左車線の進み方速くなれり。やがて川崎の料金所と思へばいくらかの辛抱と中央車線をそのまま走り、件のトラックかなりの先方行くを見る。

料金所において右側の三車線そのまま高速道に直結するゆゑ、勢ひこれを目懸けて車の集中せるは道理なり。余そこで一番左端に向ひてアクセル踏み、通行券を取りたる後、さらに勢ひを付け此度は右端の追越車線に突入す。しかれどもやがて緩行、停止の繰り返しに戻りたり。横濱インターチェンジにて左車線に入車兩の多かりしこと経験済みなり。右端の思ひのほか進み具合の宜しきに、かのトラックの中央車線を進みつつあるを前方に視認せり。然るに、インターチェンジに著くやトラックは右側に車體を寄せ、またもや余の直前に割込み、前方の視野のすべてを奪ふ。おそらく大和トンネルまで行かば滞滞は解消せむ。そこまでの辛抱なりと諦むるも、中央車線の幾分かも空かば車線を變ふる衝動を覺ゆ。されど辛抱堪らず、中央車線へと左に移らんとす、その間際にありて、直前のトラック左方にハンドルを切りたり。前方の視野開け、されば車線移動を斷念し、トラックの先方へ進みつるを見送れり。

思ひ通り大和トンネルを過ぎしころ滞滞の急速に解け、たちまちに時速百キロに到達す。家を出てよりすでに三時間過ぐ。これより後の八十キロは凡そ五十分にて走破しつらん。

追越車線を驅けに驅け、海老名過ぎ、大井松田過ぐるに、幾臺かの乗用車追越車線より離脱す。果たして眼前を塞ぎたるはかのトラックなり。山北に差し掛かり道は二股に分かる。右側高速用二車線、左側低速用二車線なり。余とトラックともに車間距離十メートルを置かず進路を右側に取りてなだれ込む。七曲りの上り坂をもつるがごとく驅け上る速度は百二十キロ、見るころはトラックの背面ただひとつ。

車線を左に移し走行車線より追ひ抜かんと謀り、たちどころにハンドルを切る。走行車線をより一層の速度で振り切らんとするも、などが併走す。次第にトラックの車輪余の運轉席に近附けり。目の高さに隣のトラックの車輪の上縁迫り來たりて、轟々と耳を揺すりて響く。やがて走行車線のかなたに乗用車を一臺認め、速度を緩め、再びトラックの後に附く。二臺打ち揃ひて乗用車を軽々と追抜きたる後、再び走行車線に移らんとす。さればと見透かすばかりにトラックも走行車線にするすると移動せり。何をかはせんと追越車線に移らばトラックも移る。相手の明確なる意圖を今にして氣付きながら、ひたすら山道を驅け上る。

と、トラックすつと左側の車線に移れり。あまりのあつけなさは疲れのゆゑか、はたまたエンジントラブルか。余アクセルを一杯に踏み込みたり。屹立する崖眼前にあり、道は鋭く左に曲線を描く。R三百の標識が目飛び込む。映畫の一シーンに似ふスローモーションの技法のごとくゆつくりと事は進む。遠心力は車を著實に道路の外に放り出し、崖に當てんと、靜かに、力強く働く。アクセルより足を外し、ゆつくりゆつくりと呪文を唱へつつハンドルを左へ左へと手繰る。なほ車體の靜かに持ち上がる氣配あり、じりじりと路肩に近附けり。トラックは我が最期を見届けんがためかセンターラインを越え、間際に寄りて竝走す。路肩に踏み入れてなほ外へ外へと移動は續き、いくばくかの後には、ガードレールに接觸せむとす。

東名高速道の灣曲部にありてR三百は最小値なり。平成十七年四月のJR福知山線脱線事故現場は過去にR六百でありし灣曲部をR三百に付け替へたる地點なり。さすれば通過上限速度を七十五キロに設定せるも、當該電車の百二十キロにて通過せんとせしがための事故とする説あり。我車體は急の上り坂でなればこそ、からうじて速度を緩め、危機を乗り越え、やうやくスピードメーターを見得るころには八十キロを指す。